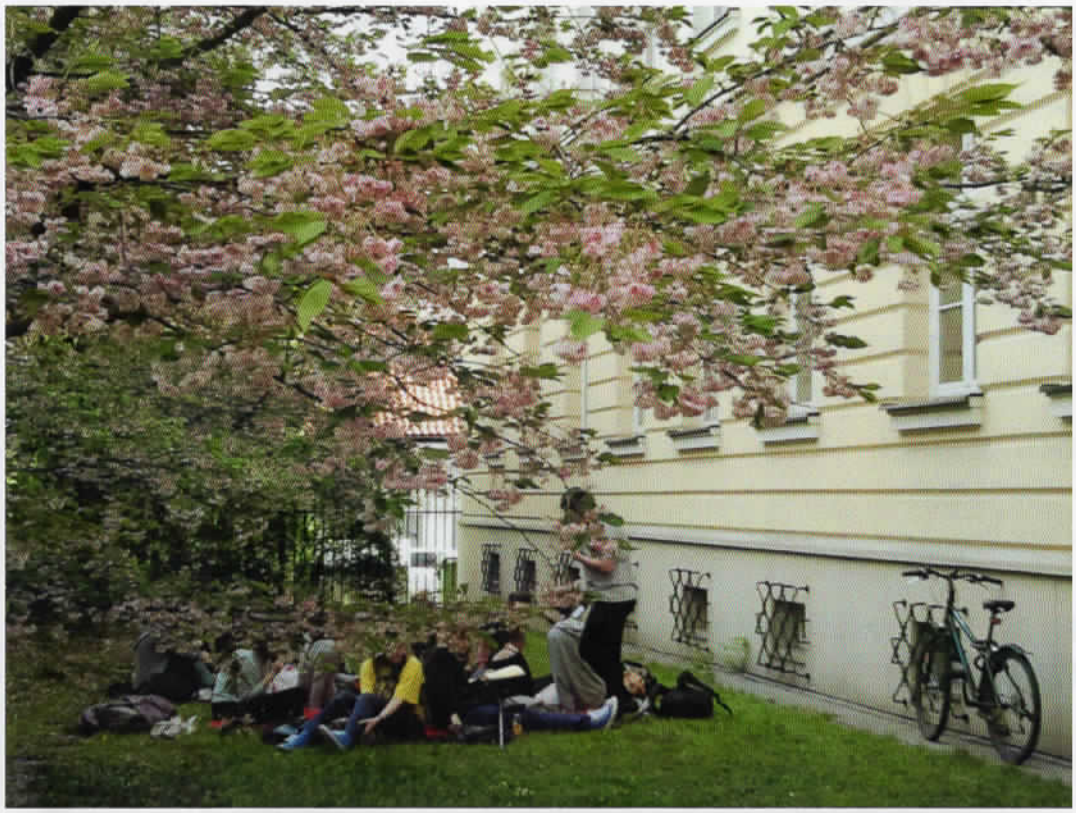
ポーランド留学生支援団体

日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報　第２０号
発行日　令和2年3月20日
事務局　日ポ・サロン
長岡　正
〒573-0084 枚方市香里ヶ丘6-14-6
TEL.072-852-2147
http://www.nipposalon.org/



先生と学生が日本学科の桜（高島浩一氏寄贈）の下でお花見

思いがけない光栄な事柄に感謝して

ポーランド留学生支援団体
日ポ・サロン代表　高　島　和　子

2019年、日本とポーランド国交100周年のお祝いが各地であり、ワルシャワ大学日本学科では10月にリヒテル・ボグダン氏による日本語講座開設100周年を記念して秋祭学会が開催されました。この記念すべき祝年にあたり、前日本学科長エヴァ・パワシュ=ルトコフスカ教授は684pもの「日本・ポーランド関係史=HISTORIA　STOSUNKÓW POLSKO-JAPOŃSKICH　TOMⅡ　1945-2019」を発刊され、その474～475pには長年に亘り日本学科学生を招聘している団体として、日ポ・サロンを顕彰し桜の行事写真と共に掲載下さいました。

又、日ポ・サロンは名称をポーランド留学生支援団体に変更後の9月に創設20周年を迎え、喜びとしていた10月15日、武田廣神戸大学学長より長年の留学生招聘活動に対し表彰を受け感謝状を頂戴しました。

この二つの光栄な事柄は、会員皆様の長年に亘るご協力とご支援があってこそと心より感謝申し上げます。

今後とも変わらぬお力添えをお願い致しましてご挨拶とさせて頂きます。

総会並びに講演会

２０１９年２月３日(日)
於/ホテル　エルセラーン３Ｆ
会員２６名・委任状：７３名提出

＜第１部＞

1．２０１８年度　事業活動報告
2．２０１８年度　会計報告並びに監査報告
3．２０１９年度　事業活動概要報告
4．今年度役員紹介
5．ＮＰＯ法人解散について
以上、諸報告並びに事業計画等について賛同決議

＜第２部＞

1．講演会　講師　松下医院院長　　松下正幸氏
演題　「健康寿命の延ばし方」
2．新招聘留学生　トーマス・デオモフスキ
(神戸大学国際文化学部)
紹介並びにスピーチ

＜第３部＞　昼食親睦会

2019年度　日ポ・サロン総会並び講演会と親睦会

槇　得　信　次

2018年度事業活動報告及び会計報告・監査報告並びに2019年度予定の事業活動報告等を拝聴しまして、理事以下役員の皆様方のご尽力に感謝申し上げます。

ＮＰＯ法人解散から任意団体への移行に伴い、事務量負担が軽減されれば有り難い事だと思います。

今回の講演で「健康寿命の延ばし方」について、学ばせて頂き、非常にラッキーでした。私達夫婦は70歳代後半の後期高齢者です。私は常日頃から健康維持には、関心を持っております。ところが妻は、絵手紙教室を主宰しておりまして、連日のように深夜1時頃から早朝の5時頃まで、寝ないで生徒さんへの資料作成等で頑張っております。

日頃から私は妻の健康が気掛かりで、深夜作業の生活習慣を改めるように忠告するのですが、改善する様子が見られませんでした。ところが驚いたことに、松下先生のご講演を真剣に拝聴していた妻が、あの日以来、生活習慣の改善に挑戦し始めたのです。私が何度となく忠告しても聞かなかった妻が、松下先生の懇切丁寧なご講演のお陰で生活習慣を改善しました。深夜から早朝には、自ら必ず睡眠時間を取るようになりました。私達夫婦は「健康寿命」維持の大切さを学ばせて頂き、本当に有難うございました。

ご講演を担当して下さいました松下先生と今回のご講演を企画して頂きました役員の方に心からお礼申し上げます。

－　感謝　－

新留学生のヨアンナさんの修士論文テーマの「新撰組土方歳三」には驚きました。私が子供の頃は、尊皇攘夷派志士鎮圧の為の京都守護職「新撰組」や幕末の志士坂本龍馬が活躍した話は、紙芝居やマンガ本で馴染みがありましたが、現代のポーランド女性留学生が「土方歳三」をご存知とは驚きでした。ヨアンナさんの熱心な研究心とご努力に敬意を表します。

「春の観桜親睦会（平安神宮）」

２０１９年４月１３日（木）
参加者　３３名

吉　岡　久　代

毎年の事ながら、桜の開花時期を予想するのは難しい。特に寒暖の極端な変化には戸惑うばかりの昨今である。そんな中、日ポ・サロンの今年の観桜会は、少し遅めの４月１３日。場所は京都岡崎の平安神宮神苑となった。花が残っていますようにと祈る気持ちで迎えた当日は、風もない青空が広がる気持ちの良い日でした。

平安神宮は平安遷都１１００年を期に１８９５年（明治２８年）に創建された比較的新しい神宮である。大きな神事は京都三大祭のひとつの時代祭である。幼い頃、平安神宮前で奴さんが毛槍を振っていた姿が絵のように記憶にある。

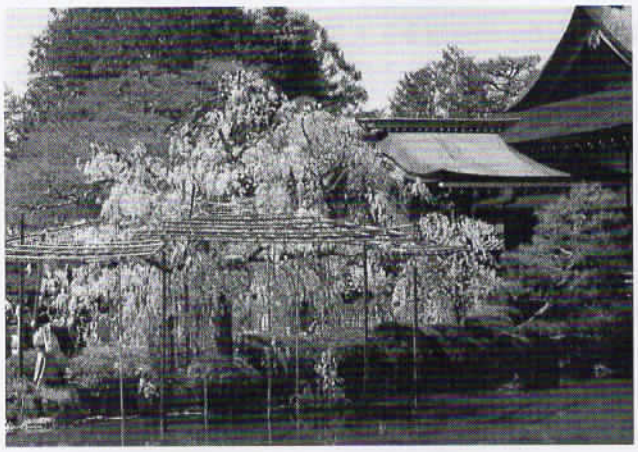
１１時、平安神宮古札納所前に集合、揃って徒歩で疏水辺りにある１２０年の歴史を持つ老舗料理店「六盛」で先ず昼食。手桶の中に旬の食材を使った京料理が詰められた手桶弁当をいただく。お腹も満足、和気藹々、心も開放されていざ神苑へ。

春の一日、和やかな会食

南、西、中、東と４つの神苑から成る庭は、小川治兵衛作庭。八重の紅枝垂れ桜や６月には花菖蒲も美しい。幸い枝垂れ桜は、染井吉野等と比べると開花が少し遅めの為か、神苑にはまだまだたくさん桜花咲き、晴れ渡った青空に映えて美しく晴れやかでした。ただ、昨年の台風に傷めつけられた老木は痛々しい姿をみせていたが、庭師の方々が丁寧に手入れされている様子を見て、日頃からこうして大切に庭を守って下さるからこそ、長い年月を経ても美しい神苑を保つことが出来るのだなぁと感謝。

子どもの頃、池に渡る橋殿で夕方、魚が跳ねる音を聞いたり、水面に浮かぶ幾重もの花びらを見たり、池に注ぎ込む水路に沢蟹を追いかけたり、軍艦ドングリを探したり・・・格好の遊び場でした。

岡崎界隈で育った私は、平安神宮や黒谷山、南禅寺、美術館の庭、岡崎グランド等々、恵まれた環境でした。
４月１３日、子どもの日に還れた一日を過ごさせていただき、ありがとうございました。



神宮苑の見事な枝垂れ桜

ルチニスカ・ヨアンナさん送別会

２０１９年８月１９日(月)
於/ホテル　エルセラーン大阪
参加　４４名

講演会講師　アグネシカ・コズィラ
ワルシャワ大学日本学科長

留学中に積んだ貴重な経験と学び

ルチニスカ・ヨアンナ

浴衣を手にして大喜びのヨアンナさん

皆様、こんにちは。ルチニスカ・ヨアンナと申します。ワルシャワ大学の日本学科の学生です。去年の１０月から８月まで、日ポ・サロンの皆様のおかげで神戸大学で日本語を学ぶことができました。

本日は留学の間に積んだ貴重な経験とか学んだことに関するスピーチをさせていただきたいです。この1年間は私にとって大事な成長への一歩でしたので皆様のご支援とご招待を今でもいただいていることを誠にありがとうございます。

最初に留学の経験について話せてていただきます。
留学は私にとって大きなチャンスでした。皆様から様々なサポートをしていただいて、日本での生活も可能になって、心から感謝いたします。日本へ来ることは去年の９月まで私の夢でしたが、皆様のおかげでその夢がやっと実現しました。ワルシャワ大学で文化、宗教、歴史などに関する知識を得たが、この1年間で私の知識が広がって習慣や伝統や日本人の考え方がわかるようになりました。日常生活を通して日本の文化をより理解でき、そこでお互いの文化の違いとその共通点も学べました。さらに、留学しながら、大勢の人々、日本人と外国人と出会う機会がありました。その中で親しくなった友達もいます。家族と離れていたけれど、ここで見つけた友達と皆様の

おかげで楽しい時間を過ごせて、たくさんの大事な思い出ができました。

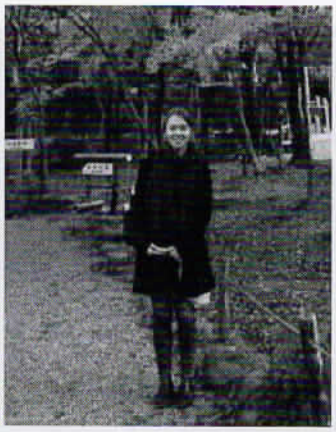
来日の一つの希望は日本語を磨くことでした。神戸大学で入学ができて良かったです。シラバスでは様々な日本語能力を上げるための科目がたくさんあって、とった授業で日本語をあやつる能力が伸ばせました。それでも私の日本語はまだ上手ではありませんが、自分の弱点についての意識が高まって、今のところは直すように頑張っています。神戸大学の先生のおかげ、段々日本語のレベルと日本についての知識も高くなりました。聞き取る能力も上達して、日本語で話すことはもっと自信を持つようになったと思います。

留学生として様々な面白い授業を取っていたので、その中からビジネス日本語の授業を取りました。授業はすごく難しかったのに敬語とビジネス表現の言い方は非常に役に立つと思ってその授業を取ることにしました。私は日本語の上達を確認するために今年の日本語能力試験も受けました。選んだレベルは高かったし、難しすぎるかもしれませんけれど実力を挑戦してみたかったです。

日本語の勉強以外、色々なイベントに参加できて、新しいことをしてみる機会もありました。茶道の稽古をしたり、落語を聞きに行ったり、相撲さんの稽古と曲水の宴にも参加できたりしていました。想像以外に楽しくて素敵な思い出ができました。留学の間に日本の伝統的な家庭料理やお菓子を味わう機会もありました。その上、皆様のご支援のおかげで色々なところの観光ができました。秋は皆様と一緒に紅葉狩りして、秋の景色を眺めました。お正月の時にもおせち料理などごちそうしていただきました。春は、花見を見にいきました。天気も良かったから素敵な思い出になりました。夏の花火大会は非常に楽しかったです。今までアニメとかドラマだけで日本の花火を見ましたが、今回は自分でその特別な雰囲気を感じられてとても嬉しいです。

私と同時に日本にいたアガと一緒に様々なところの観光ができました。沖縄、広島、名古屋、姫路、東京などに行けました。旅行中で二人で素敵な時間が過ごせて長く記憶に残ると思います。日本の魅力を楽しめました。

日本で生活を送りながら様々な新しい体験もできました。それを通して、楽しさ、寂しさ、ストレス、怖さが感じられました。驚いたこともいっぱいありました。例えば天気です。前の留学生から日本の夏は大変暑いと言われていましたが、８月になって自分自身でこの暑さを体験しました。想像したよりも蒸し暑いです。冬も寒かったです。ポーランドの冬も寒いですけれど日本の寒さと比べると微妙に異なりました。おそらく湿気のせいでではないかなと思っています。ここでも初めて梅雨と大雨も体験できました。傘をさしていたのに服は全部濡れてしまったのも驚きでした。



日本での留学の一つの希望は日本語の上達でしたが、卒業論文に必要となっている参考文献を集めるのに非常にいい機会だと思ったので、ここにいるうちに資料などを見つけるためにも使えました。以上のことと強い関係があって、これから卒業論文について話したいと思います。私の修士論文のテーマは繰り返しになるかもしれませんけれど、「戊辰戦争で土方歳三の役割」です。特に北海道で行われた戦いを詳しく研究しています。日本歴史、特に江戸時代と幕末は私にとって興味深いなのでこのテーマを選択しました。

ポーランド人は新撰組とか土方のことをあまり知識がないと思います。日本に興味がある人は主にアニメ、漫画とドラマから土方と新撰組について何かがわかりそうですがそれは浅い知識だと思います。加えてポーランドで彼に関する本、ドラマ、情報などを見つけるのは非常に難しいです。その影響で来日の時、私はできるだけたくさん資料を集めることに目指そうと思っていました。日本では新撰組と土方は人気がありそうだから、資料の収集はそんなに難しくありませんでした。私は土方歳三の大ファンです。役者のような顔をした江戸時代のイケメンの土方は私にとって面白くて不思議な人です。

皆様のおかげで、たくさんの本と資料を集めるチャンスがあって本当に感謝しております。

論文を書き始めた時、適当な資料が足りないと気付いて困りました。足りないというのは色々な本に書いてある情報は同じだったので研究の進歩がありませんでした。そういうわけで卒業論文を書きながらたくさん悩みがあって苦労しました。論文を完成するためどうすればいいかが心配でした。留学する間に、チャンスをつかんで、本がたくさん買えました。戊辰戦争と土方の戦いに関する本もたくさん手に入れました。その中に論文を書くために一番大事なのは「土方歳三の日記」という本だと思います。内容は詳細で、様々な手紙とか土方の仲間の記憶なども含んで、彼の戦いだけではなく、彼の人生についてのインフォメーションがあって、私の論文に役に立つ情報が見つけられました。土方の日記は私の論文の最後の章を完成するために非常に役に立つ本だと感じています。他に買った本では戊辰戦争の戦いに関する情報があります。戊辰戦争の戦いの原因の理解は土方歳三の動機を知るのに必要条件になると考えております。帰国した後、卒論を完成したいです。時に土方に関する本で同じ出来事についての意見が著者によって違うことが分かりました。私の研究ではその情報の比較もしてみたいと思います。異なる点についても論じたいです。

資料を読んだことと旅行のおかげで戊辰戦争の戦いなどを透視的視点から見ることができました。留学する間に多くのイベントがなされていたので、この期間に来日ができ本当に良かったと思います。例を挙げると、京都で幕末に関する展示が開催され、日野市で土方歳三の祭りもありました。この祭りは毎年５月１１日から１２日にかけて行われていますが、今年の土方の死亡の１５０周年でした。これから、見学のための旅行について話させていただきます。

留学先は神戸になって本当に良かったです。神戸の近くに京都と大阪があり、この２つの町は新撰組と深く結びついています。戊辰戦争の一番最初と後の戦いと将軍の動きは京都と大阪で行われていました。研究しながら土方と彼に率いた軍隊が京都から大阪まで移動したことも分かりました。以上の３つのところは土方と強く関係があって、今年見学ができてとても嬉しいです。そこで学んだことは修士論文に役に立つと思います。

新撰組は京都に駐留しまして、皆様のおかげであのところにも行けました。その旅行中でたくさん勉強になりました。壬生寺以外、小さなお寺もお参りしたり、面白い講義に行ったりできました。今でも京都で新撰組の遺跡を発見した時に驚きました。何回も京都に行ったことがありましたが、京都駅の近く、新撰組の記念碑があると意識していませんでした。一日中京都に過ごせて、どこに行ってもすごく感動しました。

１５０年前に土方も同じ道を歩いたことを想像した時に私はドキドキしました。今まで読んだ本の中に描写された江戸時代の雰囲気を今年自分が京都にいた時、感じられました。その時お寺以外、池田屋にもよりました。現在、池田屋は新撰組の資料館のようなところになったという印象がありました。京都ですごく楽しい時間が過ごせて、大事な勉強でした。その経験ができて、皆様に感謝いたします。

５月に日野市の祭りに参加できました。日野市は土方の生まれ育った町で、今そこで彼の資料館もあります。祭りに行った時、パレードを見た後、資料館に向かいました。資料館で展示を見て資料を集めました。買った本を読んでから今まで確信のなかったことの確認ができ、ブランクであったことについての情報も得ました。色々な本を読んだり、研究したりしたのに私にとっては土方はまだ不思議な存在です。しかし、日野市に行った時、何となく彼の人生がわかるようになりました。今まで写真と本だけで彼の生家が見られて、彼の子供の頃の考え方は明らかになりました。彼についてはいっぱい良くない噂がはやっていました、例えば新撰組の鬼の副長でした。それでも土方は自分の夢を実現するために頑張ったようなので土方を強く尊敬しています。新撰組の中で土方と沖田総司と近藤勇、その三人は努力してトップになりました。日野市に行った時、気が付いたのは土方が多くのファンがいることです。多くの人は土方にあこがれているようです。

日野市と京都旅行以外、函館にも行けました。自分の修士論文のために函館が一番大事なところだと思います。論文の最後の章では北海道で行われた戦いについて書こうと思います。この旅行は私の望みでした。函館に行った時、五稜郭と土方歳三のお墓を見に行きました。旅行の前に函館にも彼の資料館があることが分かって、とても嬉しかったです。土方の戦いは函館で終わったのでこのところは土方にとって大事な場所だと思います。函館に着いた時、見学は五稜郭タワーと五稜郭公園から始まりました。タワーの中で土方の素敵な像があり、函館戦争の展示もありました。それを見てとても感動しました。五稜郭公園で函館総行所を見学しながら、何となく土方の役割とか考え方など理解できるようになった気がします。そこで土方は重要な役割を担っていました。函館に土方の資料館で様々な修士論文のための資料を買いました。そこに展示されたものが勉強させて、新しいことも学べました。資料館で戊辰戦争中に使った武器とか見られて、戊辰戦争の兵士と土方の状況は私にとって明らかになりました。

函館で見学の最後のところは土方のお墓でした。現在、彼の亡くなったとみなされているところに石碑があります。土方のお墓が花で飾ってあって、線香を供えました。それを見て興奮しました。

旅行中たくさんの写真を撮って、その写真は自分の修士論文に載せたいつもりです。今年、日本語の学び、旅行、いっぱい良い思い出もできたし、資料の調べや研究の進みもできて何よりです。ポーランドに帰って、自分の研究を続けるつもりで、１２月末まで修士論文を完成する予定です。

皆様のご支援をいただいて、本当にありがとうございます。一年間は早く経ってしまいました。けれど、この一年間は私にとって大事な期間でした。色々と勉強になりまして様々なイベントに皆様とご一緒に参加し、土方と関係があるところの見学ができてとても嬉しいです。素晴らしい体験になったと思います。

留学は私に論文を終わらせる新しい力を与えて、帰国の後、一所懸命に完成のために頑張れると強く感じています。何回も言いますが、皆様のご支援をいただき感謝感激です。一年間本当にありがとうございます。

ご清聴ありがとうございました。

「ワルシャワ大学 日本学科の100年の歩み」を聞いて

大和田　隆

日本学科教授
アグネシカ・コズィラ氏

日本学科創設１００年と聞いて、黎明期の当時のポーランドを含む欧州の状況を想像してみた。

第一次世界大戦が終わり、ロシア革命が起こった頃でそれ以前から日本文化は注目を集めていたが、混乱が落ち着き、さらに日露戦争で日本が勝利をしたことで、日本への注目度はさらに上がっていたのであろう。

ポーランドが再独立した直後の混乱期は、ワルシャワ大学で初の日本語講座が開講されたと聞き、非常に驚き日本への好奇心が研究熱となり、それ以降もずっと幾多の先生、研究者、日本との交流があり、現在へと発展してきたという。個別の名前・著作名を挙げるのは、あまりにも多い為、ここでは割愛させていただきます。

ワルシャワ大学日本学科の卒業論文は、引用、参照する文献は、日本語原本ならば評価が高く、英独仏語に一度訳された文献ならば評価は低いと聞きました。これも卒業論文に自分の考察のみを多く入れる為でしょう。

ワルシャワ大学日本学科という外部から、日本語をベースに日本の神学・宗教・哲学を含む文化、政治、経済、生活様式、日本人の考え方へも、いい意味で提言・影響を与えてくれますよう期待しています。

ワルシャワ大学日本学科の学生の就職先としての説明もあった。卒業後の就職先として、大学、教師、通訳、観光業、政府機関などは、日本に対する知識が豊富、日本語が話せる、理科できるなどの能力を生かせることで納得がいきます。しかし現在、日本企業が欧州域内外への拠点として３００社余りがポーランドへ進出していますが、就職先としてあまり人気がないようです。

日本企業での仕事は５Ｋ（きつい、汚い、危険、給料安い、休暇取れない）＆過労死に代表されるように、働き方改革・ワークライフバランスを早く強力に推し進めていかねばならないでしょう。これもポーランド側からの的確な指摘に当たるでしょう。

なお、追記として２０２０（令２）年１月１５日、直木賞（注1）に「熱源」川越宗一著が選ばれました。
新聞記事によると、受賞作は樺太（サハリン）で生まれたアイヌのヤヨマネクフとロシア皇帝暗殺を謀った罪でサハリンに流刑となったポーランド人・ブロニフワフの人生の交差を描いた歴史小説である。選考委員によれば「近年稀に見る大きなスケールで登場人物も生き生きと魅力的に描かれている。」

日本文学小説にポーランド人が主役で描かれるのは稀であり読んでみようと思います。

（注1）無名・新人及び中堅作家による大衆小説作品に与えられる文学賞。

2019年度　新招聘留学生
神戸大学国際文化学部
トーマス・ディオモスキ

「萩原朔太郎について」

私は萩原朔太郎(1886-1942)について研究しています。群馬県、前橋に生まれた萩原は象徴主義という新しいスタイルの詩を作りました。いわゆる新体詩です。現在も彼は「日本近代詩の父」と呼ばれています。なぜかというと口語由詩を上手に使ったからです。彼は恵まれた家族に生まれました。父は裕福な開業医で生活には困りませんでしたが、周囲の人に見下ろされていました。故郷に受けた印象を３０歳の頃、「郷土望景詩」という詩に語っています。若い頃から、風邪をすぐひいていたし体が弱かったです。それだけではなく精神的に良くないです。つまり病気のために憂鬱でした。彼の学生生活はうまくいかなかったです。１９１０年、慶応義塾大学に入学して一年中で不勉強と病弱のために退学しました。この後、彼はマンドリンを習いましたし音楽会に参加して、音楽、オペラなどを楽しめます。１９１２年に北原白秋に傾倒して「朱欒」という雑誌に投稿するに始まりました。この経験をきっかけに１９１７年に第一詩集「月に吠える」を発刊して、１９２３年に第二詩集「青猫」を発刊しました。

この２冊の詩集は彼の一番有名な詩集ですので、私は「月に吠える」を中心に「青猫」についても詳しく研究したいと思います。本研究の目的は、萩原の詩の象徴や悲しみやニヒリズムばどの原因と意味を明らかにしたいと思います。私の研究の方法は萩原の色々な研究者と本研究の調査に基づいて研究することです。様々な研究者は色々な考えがあるかもしれないが、一番大切だと考えられる結果を選んで、その研究者の意見と自分の意見を伴わせて述べたいと思います。

この詩集「月に吠える」は朔太郎の処女詩集で日本の近代詩の概念を全く変革してしまいました。中村真一郎によれば、それまでの読者が「詩的」と感じていた情景が全く見られないのです。高い詩情をもつ詩人として彼は詩の中に自分の魂の告白をする。彼の歌ったものは創造者の悲哀と深い郷愁です。このため萩原をデカダンの人と呼んでもいいと思います。「月に吠える」は次のように作られた詩集です。７つの章「竹とその哀傷」、「雲雀料理」、「悲しい月夜」、「くさった蛤」、「さびしい情欲」と「見知らぬ犬」です。この章のタイトル

だけを見ると、「確かに暗い内容ですね」と考えます。タイトルの意味は萩原が序に表している通りに、「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである」ということで前述べた犬は詩人の姿の象徴だと思います。一番目の詩は印象的で地面は寂しく病気です。つまり地面は人間のように感情を持ちます。

次のように流れています：

地面の底に顔があらはれ、
さみしい病人の顔があらはれ。
地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萌えそめ、
鼠の巣が萌えそめ、
巣にこんがらがってゐる、
かずしれぬ髪の毛がふるえ出し、
冬至のころの、
さびしい病気の地面から、
ほそい青竹の根が生えそめ、
生えそめ、
それがじつにあはれふかくみえ、
けぶるごとくに視（み）え、
じつに、じつに、あはれふかげに視え。
地面の底のくらやみに、
さみしい病人の顔があらはれ。

この「地面の底の顔」がさびしい人の病気の顔ですがこの地面から「ほそい青竹の根が生えます」ので、つまり地面は顔ですか？　それとも地下に病気の人の顔が見られますか？

そして詩の作り方が素晴らしいと思います。連用形と例えば「萌えそめ、生えそめ、あらはれ」は何回も繰り返しますので、リズムができます。

次は「竹」です：

光る地面に竹が生え
青竹が生え
地下には青竹の根が生え
根がしだいにほそらみ
根の先より繊毛が生え
かすかにけぶる繊毛が生え
かすかにふるえ。
かたき地面に竹が生え
地上にするどく竹が生え
まっしぐらに竹が生え
凍れる節節りんりんと
青空のもとに竹が生え
竹　竹　竹が生え。

彼は竹の世界を紹介して、次のように「光る地面に竹が生え、青竹が生え」地面に見られる様子と地下の部分「かたき地下に竹が生え」も説明します。

私たちはだいたい地面を見るだけですが、詩人は地下の部分に興味があります。角田敏朗によれば地下の部分は詩人の神経を表しています。そして、地面は光っているが、地下は「凍れる」のですから、詩人はこの光る地面に興味を持たないみたいです。冷たい地下をもっと詳しく知りたいです。なぜこの詩は詩的ですか筆者は次のように考えます。それは、連用形の効果や５音７音のリズム、リフレーンなどが重なっているからだと思います。つまり「竹が生え」を何回も繰り返して、詩のリズムが作られる。中村真一郎も萩原の詩の実体は歌われた対象ではなく、その詩の持つ「音楽」と「リズム」ですと述べています。

「青猫」は朔太郎の「月に吠える」を発刊した６年後の第二詩集です。序に詩人は述べているように自分の詩の本質を分析しています。

「私の情緒は、激情という範疇に属しない」。それは「しづかな靈魂ののすたるぢや」です。「靜かに靈魂の影をながれる雲の郷愁である」。遠い遠い實在への涙ぐましいあこがれである」青猫という詩集も暗い雰囲気を含んでいると思います。なぜかというと萩原は自分の影、つまり悪い印象と悲しい過去から逃げたいがそれはできないです。彼は自分の影に恐れて、感情的な詩を作ります。「青猫」という詩の前に次のような文が書かれている「ここには一匹の青猫が居る。そうして柳は風にふかれ墓地には月が登ってゐる」。

この文章は詩集の全部の雰囲気と意味を表していると思います。詩は次のように書いてあります：

この美しい都会を愛するのはよいことだ
この美しい都会の建築を愛するのはよいことだ
すべてのやさしい女性をもとめるために
すべての高貴な生活をもとめるために
この都にきて賑やかな街路を通るはよいことだ
街路にそうて立つ桜の並木
そこにも無数の雀がさへづつてゐるではないか。
ああ　このおほきな都会の夜にねむれるものは
ただ一匹の青い猫のかげだ
かなしい人類の歴史を語る猫のかげだ
われの求めてやまざる幸福の青い影だ。
いかならん影を求めて
みぞれふる日にもわれは東京を恋しと思ひしに
そこの裏町の壁にさむくもたれてゐる
このひとのごとき乞食はなにの夢を夢見て居るのか。

都会の夜空に眠る「青猫」の影。それは何かの美のようなものを感じさせるのですけど、しかしこれは萩原の個人的な情意表象ですし、一般的には解きにくい造語です。これは筆者が自分の自序に表しています。

「集中の詩『青猫』にも現れてるごとく、都会の空に映る電線の青白いスパークを、大きな青猫のイメージに見ているので、当時田舎にいて詩を書いていた私が、都

会への切ない郷愁を表象している」という部分があります。実際にはこの解説も十分とは言えないが、詩人は書いたもののイメージを表します。「ただ一匹の青い猫のかげだ、かなしい人類の歴史を語る猫のかげだ、われの求めてやまざる幸福の青い影だ」この部分で猫の影があるので、この猫はなんか昔の悲しさを考えさせます。そして田舎と異なる魅惑的なところとして、青猫の影の映る都会を夢見たのです。

次は萩原朔太郎はオノマトペを時々使いました。
これは動物の声だけではなく、心の感情でも表しています。

例としては、「恐ろしく憂鬱」：

こんもりとした森の木立のなかで
いちめんに白い蝶類が飛んでゐる
むらがる　むらがりて飛びめぐる
てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ
みどりの葉のあつぼったい隙間から
ぴか　ぴか　ぴか　ぴかと光る　そのちひさな鋭い翼つばさ
いっぱいに群がってとびめぐる
てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ
てふ　てふ　てふ　てふ
ああ　これはなんという憂鬱な幻だ（中略）

作者はこの詩で表現したのは、蛾と蝶そのものの群がりではない。「てふ　てふ　てふ」という蝶の羽音でもないです。その主題は「ああこれはなんといふ憂鬱な幻だ」というその憂鬱なものです。

以上で、萩原朔太郎は高い詩情を持つ詩人で印象的な世界を作って日本で新しいスタイルの詩またはオノマトペの詩を広げたと言えます。
彼の世界は深い懐かしさと悲哀を含んでいます。その結果萩原は現代詩のシンボル的な詩人と思わないでしょうか。

秋の親睦会　～奈良高取かかし祭り～

澤　瀉　徹　郎

１０月２１日　近鉄壺坂山駅に集合して“高取かかし祭り”に出掛けました。留学生トーマス・ディモフスキ君を含め１３名の参加となった。

日本一の山城「高取城」の城下町として栄えた高取町は、昔から町家が多く現存し当時の佇まいを残している。
駅前から土佐街道筋（註）にかけて５０ヶ所、約２００体の町家の案山子が迎えてくれた。

註　土佐町の由来
６世紀の初め頃、大和朝廷の都造りの労役で故郷土佐国を出てこの地に召しだされたものの、任務を終え帰郷するときには朝廷の援助がなく、帰郷が叶わずこの地に住み着いたところから土佐と名付けられた。この土佐町には有史以来貴重な歴史を秘めている。

駅前には案山子の案内人（写真①）がマップを配布親子３体がそれぞれの表情で“高取町へようこそ！”と出迎え、暮らしの一場面を切り取った自然な姿にほっこり!!

土佐街道の街並みは昔の田園の案山子から町家の案山子に変身、子供やおじいちゃん、おばあちゃん、そして七福神や古代人の案山子たちまで愛嬌たっぷりの等身案山子で、本物と間違えそうなリアルでどこかユーモラスな心温まる佇まいの案山子巡りで、秋の散策を楽しむ町家の“かかし祭り”を満喫した。

●タコ焼き屋（写真②）“おっちゃんタコ焼きちょうだい！”アツ！　アツ！
●おばちゃん二人で草むしりしている（写真③）
　本物と間違えるリアルな案山子
●トランプ大統領と安倍首相等の大阪サミットが高取町で（写真④）　時事ネタも登場
●今、大人気のチコちゃん（写真⑤）ボ～ッと生きてんじゃねーよ！
●楽しいコンサート（写真⑥）“秋の夕日に　照る山もみじ・・・”歌が聞こえてきそう♪
●奈良の置き薬屋さん（写真⑦）漢方薬の置き薬屋さん全国へ向けて売薬

全て手作り案山子で暖かさと親近感があり、話しかけたくなるひと時だった。

町家カフェ「のこのこ」では、全員で楽しい昼食会を済ませ、午後はキトラ古墳へ向かった。
キトラ古墳周辺地区は国営飛鳥歴史公園として整備され、美しい自然環境の中で飛鳥に関わる歴史体験が楽しめました。古墳丘にある石室の中から壁画が発見され保存事業が進められた。高松塚古墳に続き２番目の発見で大陸風の壁画古墳です。「四神の館」は国宝です。後半、雨模様に見舞われたので三々五々解散となった。

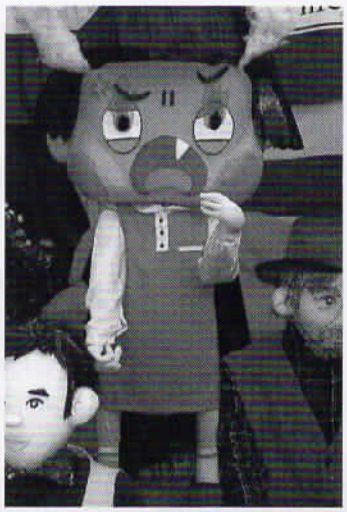
“今にも語りかけてくる高取案山子たち”

写真① 駅前の３人の案内人

写真② たこ焼屋さん

写真③ おばちゃん二人草むしり

写真④ 高取サミット



写真⑤ ご存知“チコちゃん”

写真⑦ 置き薬屋さん

写真⑥ 秋のコンサート♪

神戸大学学長より感謝状を授与

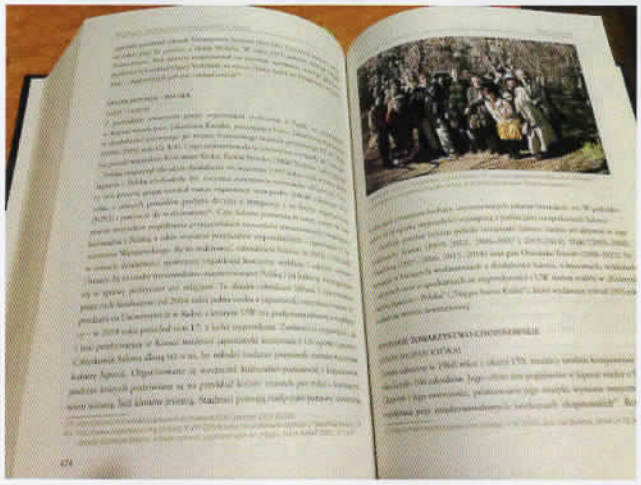
（令和元年10月15日）

関西在住日ポ・サロン後援留学生（2019年度）

マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文化学専攻
ヤヌシュ・ミトコ	京都大学文学研究科現代史学専修
アガタ・ブイエジボフスカ	神戸大学経済学研究科講師
ウルシュラ・アルトマイエル	神戸大学国際文化学部
ナタリア・ガルボッチ	神戸大学国際文化学部
ヨアンナ・ルチニスカ	神戸大学国際文化学部
トーマス・ディオモスキ	神戸大学国際文化学部

HISTORIA STOSUNKÓW POLSKO-JAPOŃSKICH TOMⅡ 1945-2019

「日本・ポーランド関係史」
エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ教授・著作



日ポ・サロンについて書かれている箇所（474-475P）

ポーランド留学生支援団体　日ポ・サロン

http://nipposalon.org/

＜ 編集後記 ＞

日ポ・サロン創立２０周年を迎え、会報も２０号発刊となり感慨無量です。皆様にお礼申し上げます。

活動の記録として招聘留学生の紹介、日本での生活を中心に内容作りをしてきました。会報各号は日ポ・サロンのホームページに掲載していますので開いて見て下さい。

特に創刊号は創立を祝して名誉会員の高島浩一氏、日本学科・岡崎先生のお言葉など日ポ・サロンの思い意気込みが盛り込まれ、今日まで続いてきたことが有り難く感謝でございます。

留学生の修士論文の取組、日本での生活についての報告文は感心させられることばかりで我々は良い刺激を受け学びの場です。ワルシャワ大学日本学科と神戸大学との交換留学も着実な交流となり両国の若者の成長は楽しみです。皆様のご感想、ご意見をお寄せ下さい。

よろしくお願い致します。

事務局　岸　本　啓　子